＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要

１．プロジェクトの名称・目的と方法

（１）名称

♪どれみふぁそったくん♪

～子どものためのアウトリーチ～

（２）目的

地方の小学校、及び福祉施設の子どもなど、普段生の演奏を聞く機会の少ないと思われる子ども達に向けて出張で演奏会を行い、子ども達にとってよき音楽体験となる機会を提供する。

ただ聴くだけの鑑賞会にとどまらず、楽器のしくみや音楽の歴史について知るなど学習の面を持ち、生涯学習としての視点を意識し音楽に関わることのできる場面を設けるなど、よき音楽体験として子どもたちに変化をもたらす機会となり得るよう留意する。

また、それぞれのニーズにどう応じられるか、主催する側の意向をどこまで実施できたか、実践を通して報告する。

（３）方法

①実施先とアポイントメントを取る。現場のニーズを把握する。

②現場のニーズに応じた授業や演奏会の企画案を作成し、実施に向けた準備をする。

③現場の方に企画内容を確認して頂き、企画案を修正し改善案を作成する。

④実施後、映像記録や子どもへのアンケート結果から、現場のニーズに応えられているか、学習の面はあるか、参加型であるかという３つの視点から分析を行う。

２．代表者及び構成員

・代表者

西行仁美　　音楽領域専攻４回生

・構成員

（運営・演奏）

伊藤史織　　音楽領域専攻４回

肥後結美子　音楽領域専攻４回

安藤光平　　音楽領域専攻２回

榎木薗直子　音楽領域専攻２回

中村安穂　　音楽領域専攻２回

谷口沙也佳　音楽領域専攻１回

瀬川実来乃　音楽領域専攻１回

（演奏）

濵村瞳　　連合教職大学院１回生

青木輝　　音楽領域専攻４回生

岩本悠香　　音楽領域専攻４回生

大森祐奈　　音楽領域専攻４回生

寺田有芙　　音楽領域専攻４回生

宮側拓哉　　音楽領域専攻４回生

森下悠児　　音楽領域専攻４回生

坪倉未帆　　音楽領域専攻１回生

中村来実　　音楽領域専攻１回生

３．助言教員

田邉織恵先生（音楽科）

４．アウトリーチについて

Out（外へ）reach（手を差し出す）という意味の英語である。元々社会福祉の分野で行われる地域社会への奉仕活動や教育普及活動などの意味で用いられていた。現在では、現場へ出向いて活動する「訪問 ○○」「出前○○」といった受け手のニーズに合わせた取り組みも指す。(1)

音楽分野でのアウトリーチ活動とは，音楽家や音楽団体などが音楽に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ，音楽を普及することであり，さらに提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむという双方向的なスタンスが特徴である。

第２章　内容・実施経過

（４月）・研究目的、企画案の検討
・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」　打ち合わせ
・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」　参加
（８月）・寺田小学校への挨拶、訪問
（11 月）・寺田総学校　演奏会実施
（１月）・e-Project 研究発表会

第３章　実施結果・分析

１．第 28 回『うたとおはなしの会』

（１）実施までの流れ

昨年の第 27 回『うたとおはなしの会』に参加させていただいたことから、本学幼児教育専攻教授の平井恭子先生より、第 28 回『うたとおはなしの会』の参加依頼をいただいた。「幼児に生の演奏を楽しむ機会を持たせる」ことの他に、「みんなが歌える曲目を演奏してほしい」、「親御さんが学校等で耳にしたことがあるような、小学校の教材にあるようなクラシックの曲で、できれば明るいものを演奏してほしい」、「会の終了後に楽器とふれあえるような時間を設けてほしい」という要望があった。

会の進行は幼児教育専攻の学生と構成メンバーで行い、奏者は「音楽隊」という設定で会に参加することとなった。

ディズニー映画『モアナと伝説の海』がヒットした時期であったことから、この映画の主題歌の演奏も行うこととなった。

（２）実施内容

①日時　平成 29 年 4 月 29 日（土）10:30～11:30
②対象　幼児
③ねらい　幼児に生の演奏を楽しむ機会を持たせる。
④演奏曲目
《トルコ行進曲》モーツァルト作曲
《どこまでも~How Far I'll Go~》リン・マニュエル・ミランダ作詞／作曲
《夢をかなえてドラえもん》黒須克彦作詞／作曲
《インマークライナー》シュライナー作曲
⑤演奏者
濱村瞳（バスクラリネット）、西行仁美（電子ピアノ）、宮側拓哉（電子ピアノ）、安藤光平（ヴァイオリン）、榎木薗直子（クラリネット・歌）、中村安穂（歌）、谷口沙也佳（ヴァイオリン）
⑥展開

1 幼教の学生による歌遊びや読み聞かせなど
2 奏者登場
幼教の学生の「何か音が聴こえてくるよ」という発言を合図に、ステージ袖においてヴィヴァルディ作曲《春》のワンフレーズをヴァイオリンで演奏し、その後ステージ端から登場する。
3 楽器等紹介
各自、楽器等（ヴァイオリン、クラリネット、バスクラリネット、電子ピアノ、歌声）を紹介し、音色を披露する。
4 ヴァイオリン２重奏《トルコ行進曲》の演奏
5 声楽２重唱
《どこまで～How Far I' ll Go～》の演奏
6 器楽アンサンブル
《夢をかなえてドラえもん》の演奏
鈴など音の鳴る簡単なおもちゃや楽器などで一緒に音楽を楽しむ。
7 クラリネット独奏《インマークライナー》の演奏
（『うたとおはなしの会』終了後）

（３）分析と考察

・視点①　現場のニーズに応えているか

現場のニーズとしては、「幼児に生の演奏を羅の

シム機会を持たせること」に加え、「幼児みんなが知っていて一緒に歌えるような曲目の演奏」、また「幼児の親が学校などで耳にしたことがあるような、小学校の教材にあるようなクラシックの曲で明るめの曲の演奏」、「会の終了後に楽器とふれあえるような環境の設定」が挙げられた。「幼児みんなが知っていて一緒に歌えるような曲目の演奏」には《夢をかなえてドラえもん》や、当時の流行を取り入れたものとして《どこまでも~How Far I'll Go~》を、「幼児の親が学校などで耳にしたことがあるような、小学校の教材にあるようなクラシックの曲」には《トルコ行進曲》を、「会の終了後に楽器とふれあえるような環境の設定」については、クラリネットがどんどん小さくなっていくという視覚的な面白さを取り入れた《インマークライナー》の演奏を、それぞれ行った。

《夢をかなえてドラえもん》は言わずと知れた国民的なアニメソングであり、幼児のような年代の子どもたちからも親しまれている曲であると言える。演奏の場面では、音の鳴る簡単なおもちゃや楽器などでリズムをとったり、その場で小さく揺れたり踊ったりしている姿が見られた。また、サビの部分では一緒に歌う姿も見られた。よって、「みんなが知っていて一緒に歌えるような曲の演奏」というニーズには応えられたと言える。

《夢をかなえてドラえもん》演奏

しかし、《どこまでも~How Far I'll Go~》については、幼児に人気であることを予想していたが、実際の演奏の場面では一緒に歌うというところまでは至らなかった。映画『モアナと伝説の海』を観ていない子どもたちも少なくなかったことが考えられる。幼児が大好きな音楽や心に響く音楽がどのようなものかを理解する難しさと共に、子どもの音楽との出会いを作る側としてその大切さを感じた。

《トルコ行進曲》は誰もが耳にしたことのある大変有名なクラシック曲であると言える。さらにこれは小学校の教材としても扱われていることから、「幼児の親が学校などで耳にしたことがあるような、小学校の教材にあるようなクラシックの曲」というニーズに応えられたと言える。

《インマークライナー》は演奏が進むにつれてクラリネットがどんどん小さくなる（上管、下管などを取り外していく）というユニークな曲である。クラリネットが小さくなっていくのが視覚的に捉えられることで、幼児にとっても楽器に興味を持つ機会になり得たのではないかと考えられる。実際に演奏の場面では、食い入るようにクラリネットを見つめたり驚いたりする姿が見られた。

・視点②　学習の面はあったか

『うたとおはなしの会』に参加し演奏したことで、幼児らの音楽経験を増やし、音楽や楽器との新たな出会いの場となったのではないか。特に今回はバスクラリネットによる演奏もあったため、幼児にとっては生で聴く機会の少ない楽器の演奏を聴く機会になったと考えられる。楽器や音楽に興味を示したり遊んだりすることは、音楽に対する愛情を深める素地になり得るだろう。この点においては幼児にとっての学習になり得たのではないだろうか。

・視点③　参加型であったか

平井先生からの要望の一つとして「みんなで一緒に歌える」ことが挙げられていたが、実際には歌っている子もいれば体を揺らしている子や踊っている子、音の鳴る簡単なおもちゃや楽器でリズムを取ったりを振ったりしている子など、様々な

様子が見られた。

しかし、歌を一緒に歌うだけでなく、音楽に合わせて体を動かしているということも、音楽に参加している姿であると言えるのではないかと考える。《夢をかなえてドラえもん》を演奏している時が子どもたちは一番盛り上がっていた。これはこの曲がプログラムの最後の曲であることのみならず、自身に親しみのある曲であることが大きな理由として考えられると考察する。この曲のことを耳にしたことがあったり知っていたりする子が多かったことが予想される。

これらのことから、参加型にするためには、その音楽に親しみをもっていることが重要であることが考えられる。

２．城陽市立寺田小学校

（１）実施までの流れ

城陽市立寺田小学校の本大学音楽領域専攻卒業の先生から、芸術鑑賞としての音楽演奏会の依頼をいただいた。前回の芸術鑑賞ではプロの交響楽団の演奏会であったが、今回は子どもとの距離が近い音楽会にしたいとのことで、依頼をいただくこととなった。

訪問の際の打ち合わせでは、全校児童が５００人ほどであり、体育館で全員で見ると後ろの子がしっかり見えないことから、１～３年、４～６年の２部構成でやってほしいとの要望があった。また、芸術鑑賞という正式な行事であるため、小学校の教材となっている曲目の演奏という要望もあった。さらに、本プロジェクトが依頼をいただいた理由である「子どもとの距離が近い音楽会」にするために、子どもが参加できるような場面を設けてほしいとの要望もあった。

打ち合わせの後、体育館を見学させていただき、ピアノや声など音の響き方を確認した。

訪問以降の当日のプログラム等の打ち合わせはメールや電話で行った。

（２）実施内容

①日時　　2017 年 11 月 2 日（木）
　　9：35～10：20（低学年）
　　10：45～11：30（高学年）

②対象　　児童

③ねらい　児童に生の演奏を楽しむ機会を持たせる。

④演奏曲目

《トルコ行進曲》モーツァルト作曲
《インマークライナー》シュライナー作曲
《ラデツキー行進曲》ヨハン・シュトラウス作曲
《聖者の行進》黒人霊歌（低学年）
《ドレミのうた》オスカー・ハマースタイン作詞
　　リチャード・ロジャース作曲
　　（低学年）
《ふるさとの四季》源田俊一郎編曲より抜粋
・《春の小川》高野辰之作詩（林柳波　改作）／
　　岡野貞一作曲
・《茶摘》文部省唱歌
・《われは海の子》文部省唱歌
・《紅葉》高野辰之作詩／岡野貞一作曲
・《冬景色》文部省唱歌
・《雪》文部省唱歌
・《故郷》高野辰之作詩／岡野貞一作曲
《O Sole Mio》ジョヴァンニ・カプッロ作詞／
　　イル・ヴォーロ作曲

⑤演奏者

田邉織恵（ソプラノ）、青木輝（指揮、ドレミパイプ、バス）、岩本悠香（ユーフォニアム、アルト）、大森祐奈（クラリネット、アルト）西行仁美（アルト）、寺田有芙（ピアノ）、肥後結美子（ピアノ、スネアドラム、ソプラノ）、森下悠児（トロンボーン、テナー）、坪倉未帆（ドレミパイプ、ソプラノ）谷口沙也佳（ヴァイオリン、ドレミパイプ、ソプラノ）、中村来実（クラリネット、ドレミパイプ、ソプラノ）

⑥展開

1はじめの挨拶をする。
2ヴァイオリン２重奏《トルコ行進曲》演奏
ヴァイオリンの音色について感想を聞く。
3クラリネット独奏《インマークライナー》演奏
クラリネットが分解されてどんどん小さくなっていったことを振り返る。感想を聞く。
4楽器紹介
器楽アンサンブルで用いる楽器（スネアドラム、ユーフォニアム、トロンボーン、クラリネット、ヴァイオリン）を紹介し、音色を披露する。楽器を紹介する際、楽器のしくみや用いられている素材の話などをすることで、楽器に興味を持ってもらったり親しんでもらったりすると共に、これからの器楽アンサンブルをより楽しめるようにする。
5器楽アンサンブル《ラデツキー行進曲》演奏
6［低学年］ドレミパイプ体験《ドレミのうた》
（２）ドレミパイプ《聖者の行進》演奏
ドレミパイプの演奏の仕方などを紹介すると共に、誰にでも簡単に、楽しみながら演奏できることを感じてもらう。この時、鳴る音の高低とパイプの長さの関係に注目する場面を設ける。
（３）児童による《ドレミのうた》演奏
挙手の中から32名の児童に体験してもらう。
6［高学年］指揮体験《ラデツキー行進曲》
（１）指揮の説明を受ける。
（２）全員で指揮を振ってみる。
（３）指揮体験
挙手の中から５名の児童に体験してもらう。
7混声４部合唱《ふるさとの四季》演奏
混声合唱について簡単に説明することで、混声合唱をより楽しんでもらう。
8声楽独奏《0 Sole Mio》演奏
簡単なく曲紹介をすることで、イタリア語の歌詞やダイナミックな演奏をより楽しんでもらう。
9おわりの挨拶をする。

（４）分析と考察

視点①　現場のニーズに応えられているか

現場のニーズとして、「子どもとの距離が近い音楽会」があった。これついては、⑥展開6に示したように、子どもがドレミパイプや指揮を体験するといった参加型の場面を取り入れた。また、後ろの子も全員が見えるようにするために低学年、高学年の２部構成ができた。さらに、《インマークライナー》の演奏や《0 Sole Mio》の演奏においては、演奏者ができる限り子どもの近くまで歩み寄って演奏した。

《インマークライナー》演奏。クラリネットはどんどん分解されて小さくなっていく。最後にはここまで小さくなる。
奏者はできる限り子どもの近くで演奏している。

これより、子どもも一緒に参加する音楽会にできたこと、２部構成であったことや子どもの間近で演奏したことなどから、子どもとの距離が近い音楽会にするというニーズに応えることができたと言える。

また、芸術鑑賞という正式な行事であるために小学校の教材となっている曲目を演奏してほしいというニーズについては、《トルコ行進曲》や《ふるさとの四季》、《聖者の行進》《ラデツキー行進曲》など、実際に小学校の教材となっている曲目をプログラムに入れることができた。また、それらの曲目をさらに様々な演奏の種類（ヴァイオリン２重奏、混声合唱、ドレミパイプ、器楽アンサンブルなど）で演奏することができた。

↑器楽アンサンブル《ラデツキー行進曲》

これより、小学校の教材となっている曲目を多数演奏できたことから、このニーズにも応えることができたと言える。

↑混声合唱《ふるさとの四季》。
教材である文部省唱歌などをメドレーで歌った。

視点②　学習の面はあったか

⑥展開4の楽器紹介で楽器のしくみや用いられている素材の話などをしたことが学習の場面として考えられる。例えば、スネアドラムは楽器のある部品で締めることによって音色を変えることができ、締めたときに音が高くなることや、トロンボーンがスライドによって演奏する楽器であり、スライドを伸ばしたときに音が低くなり縮めたときに音が高くなること、リード楽器のリードは葦という植物を用いており、それを震わせることで音を鳴らしていること、ヴァイオリンの弓は馬の尻尾を集めて平らにしたものであることなどを紹介した。

また、ドレミパイプを紹介する場面においても、鳴る音の高低とパイプの長さに注目する場面を設けた。

↑音の高低とパイプの長さに注目する場面

指揮体験では、指揮が音の大きさを変えたりテンポを変えたりする働きがあることを説明し、全員が演奏に合わせて指揮を振ってみる場面を設けた。また、「小さく演奏してほしかったらどう振ればいい？」「速くしたかったら？」「遅くしたかったら？」などを児童に問いかけることで、児童自身が指揮を考える場面も設けた。

これらのことから、ドレミパイプを含めた楽器紹介、指揮体験において、学習の面があったと言える。

視点③　参加型であったか

視点①でも述べたように、ドレミパイプ体験や指揮体験を行ったことなどから、参加型であったと言える。

第４章　まとめと反省、今後の展望など

これまで三つの視点を持って活動を行ってきた。

視点の一つ目である「現場のニーズに応えられているか」については、昨年度の反省点として、ニーズの内容を具体的に把握するために現場側とより密な打ち合わせを行うことが挙げられていた。

この点については、今年度の実施が回数が少なかったことや、依頼をいただいたのが学内の先生や音楽領域専攻の卒業生であったことから、打ち

合わせを充分に行えたものと考える。

また、打ち合わせについては、昨年度と今年度の活動を通して、直接会うことで、メールではしづらい細かな相談も一緒にしてしまうことができたり、依頼側と企画側の考え違いなどが防げたりすることを感じた。よって、打ち合わせは直接会うことが最も望ましいものと考える。このことから、来年度からは打ち合わせはできる限り直接会いに行くように意識する必要があると考える。

また、今年度の現場のニーズとして２件に共通しているのが、「小学校の教材を用いること」であった。そもそも本プロジェクトは小学校などの子どもを対象にアウトリーチを行うとする活動であるので、演奏の曲目として教材が求められる可能性は今後も高いだろう。そこで、今後の課題として、教材として扱われている楽曲から演奏できそうなものを前もって検討し、リストを作るなどして幅広くニーズに応えられるような状況を作っておくことで、ニーズに対する柔軟な対応や、今後の活動の広がりを期待したいと考えている。

二つ目の視点「学習の面はあったか」については、昨年の反省点として、福祉施設での実施や幼児を対象とした実施なども含まれることから、「学習」の捉え方を再考していくことが挙げられていた。この点についは、偶然筆者が大学の講義等で幼児教育について学ぶ機会があったことにより、幼児を対象とする場合は何が幼児の「学習」になるのかが少し理解できた部分があった。昨年度は幼児を対象とした実施に学習の面を持たせることができたのか、できるのかについて全く考え及ばなかったが、今年度は、上にも述べたが「楽器や音楽に興味を示したり遊んだりすることが音楽に対する愛情を深める素地になり得る」という視点で活動を捉えることができた。このことから、「学習」の捉え方については、何が「学習」となるのかを知る必要があり、そのためには対象となる子どものことを理解することが大きな鍵を握ると感じている。そこで、今後の課題として、学習の面を考える際に対象となる子どものことを理解する視点をもつことを挙げる。

三つ目の「参加型であったか」については、今回行った企画の全てで実施できたと考える。今後も、演奏をしに行くだけのアウトリーチに留まらず、子どもが主体となるように演出を工夫することを引き続き課題としていきたい。

活動全体を見ると、今年度は昨年度に比べて、対象の視野を広げることや実施の回数を増やすなど、活動を広めるようなことはできなかった。

しかし、２件の実施のうち、現場のニーズに応える、学習の面をもたせる、参加型にするという三点の視点をしっかり踏まえた実施であったと考えている。特に現場のニーズに応えることについては、ほぼ満足のいく活動ができたと思っている。これは、打ち合わせをしっかり行えたことの他に奏者の努力によるところも大きい。例えば児童による指揮体験を実現させるためには、奏者が児童の指揮をしっかり見ながら演奏することが求められる。つまり、演奏するときに楽譜から目を離せるだけの余裕がなければならないということである。しかし奏者はこの点を踏まえた上で練習を積んでいた。指揮体験の実現は奏者の努力によるものであったと言える。

回数を減らしたことで得た学びを今後の活動に生かしながら、来年度は活動を広めていけるようにしたい。

演奏面の課題として、昨年度からもニーズに合う奏者の確保が挙げられていたが、今年度もその課題は残されたままである。実施には至らなかった依頼に、『第 29 回うたとおはなしの会』があった。この依頼は和楽器の演奏というニーズがあったが、和楽器を演奏できる者を探しだせなかったために依頼を受けることができなかった。ニーズに応えるられる環境を整えるためにも、引き続き音楽領域の学生間にこの活動を広め、多くの学生に知ってもらうことで連携の取れる団体を増やす必要があると考える。

また、構成メンバーの中で運営に携わる者が少数であったことなどから、書類申請すればもらえるはずの援助金を書類申請せずに自身で負担することがあったり、楽譜のコピーや印刷など申請する間もなく今その場で費用が必要になる場面が多くあり、費用を自身で負担することが度重なってしまった。これより今年度の反省として、演奏のみならず企画に関わるメンバーを増やし、プロジェクトが円滑に運営できるようにすることが必要である。そのためには運営に携わることの良さや喜び、得られるものなどを積極的に発信することで運営にも興味をもってもらえるよう努力することが必要である。

＜参考・引用文献＞

（１）松本 菜摘,河添 達也（2015）「小学校音楽科における「教育プロジェクト型アウトリーチ」の授業開発研究」『島根大学教育臨床総合研究』島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センターpp.181-190

（２）林睦(2009)「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察―日本における導入 10 年と今後の課題」『音楽教育学の未来』音楽之友社, pp.280-290.